

11月2日（月）16：00～18：00

## シンポジウム 「ともに道をひらく」

（10階：1004～1007）

座長：小倉 紀蔵（京都大学教授）

シンポジウム「ともに道をひらく」に際して

パネリスト：

竹中 英俊（竹中編集企画室代表・東京大学出版会嘱託）

将来世代とともにあろうとすることによって、出版と本はあり得る

野島 透（方谷塾塾長、山田方谷直系六代、都市再生機構理事（財務省））

将来に開かれる社会を目指して

中桐 万里子（リレイト：親子をつなぐ学びのスペース代表、二宮尊徳七代目）

ともに道をひらく

鎌田 東二（京都大学教授）

道開きと「おひらきまつり」の2つの意味

コメンテーター：服部 英二（地球システム・倫理学会会長）

小倉 紀蔵  
(京都大学)

私が中国思想のなかで、老子・荘子などの道家よりも、孔子のほうが好きなのには理由がある。

それは、道家は「すべてのもの・ことのまえにあらかじめ道がある」というからだ。これが道家という思想集団の核心的なコンセプトである。

「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」と老子はいう（『老子』第四十二章）。宇宙万物の根源である無為自然の道は、人間をはるかに包み越えてアプリアリに存在する。人間の営みなど、この道の広大無辺さに比べればちっぽけで取るに足りないものだし、人間の作為はつねに道にさかたって、道をそこなう方向性に進む。

たしかに道家の思想はかぎりない魅力をたたえている。しかし私としては、やはり、孔子の思想のほうがしっくりくる。道家の思想には、人間的な自由がないのである。人間が自律して新たな道を切り開いていく、という自由が、そこにはない。すべてはあらかじめ、道によって決められているのである。

これに対して、孔子は、道が人間を超えたところにあらかじめ存在する、などとはいわない。孔子の思想を、「あらかじめ存在する普遍的な道に合わせて人間陶冶をしなくてはならない」というように窮屈な道徳体系として解釈したのは、後世の儒者という人びとの捏造なのである。

孔子は、「人、能（よ）く道を弘（ひろ）む。道、人を弘（ひろ）むに非（あら）ず」（『論語』衛靈公第十五）とあって、人間の主体性が道をつくっていくのだと語っている。これを、「あらかじめ存在する道の内容を人間が実現していくのだ」というふうに解釈するのは間違いである。道の内容はあらかじめ決まっているのではない。道の内容は、人間が決めていくのであると、孔子は語っているのである。

「君子は本（もと）を務（つと）む。本立ちて道生ず」（『論語』学而第一）というのも重要な言葉である（孔子自身の言葉ではなく、孔子の弟子である有子の言葉だが）。これははっきりと、君子が根本を確立すると、道が生ずるのだと語っている。だが、「道という道徳の根本はあらかじめ存在する」という固陋な道徳主義者たちは、この「道生ず」という言葉を、「道がわかる」とか「道を体得する」などと解釈する。そうではない。文字通り、「新しい道が生じる」と解釈すればよいのだ。

『論語』のなかで孔子は、「君子とは間違える人びとだ」ということを何回も語っている。もし絶対正しい道があらかじめあって、君子はその道の根本を確立した人格者なのだとしたら、どうして君子という人が間違ったりするであろうか。そうではない。孔子が言いたいのは、君子とは道徳的人格ではない。ある人がある瞬間に、道を立ち現わすことができたとき、そのときに君子という現象も立ち現われるのだ、と語っているのである。だから逆にいえば、君子は往々にして間違える存在でもあるし、間違えたら修正すればよいのである。

「ともに道をひらく」ことができるよろこびを分かち合うことを、たのしみにしている。

将来世代とともにあろうとすることによって、出版と本はあり得る

竹中 英俊  
(東京大学出版会囑託)

出版、特に、大学出版・学術出版に関わって40年余がたつ。そのなかで、常に考えてきたのは、《出版はどこで成り立ちうるのか》、そして《書物は誰のためにあるのか》ということであったし、紙の本の存在が電子書籍の存在によって大きく変化しようとしている現在もまた考え続けている。

出版は、書く人＝著者なくしては成り立たない。読む人＝読者なくしては成り立たない。作る人＝出版者なくしては成り立たない。その他もろもろなくしては成り立たない。

では、書物は誰のためにあるのか。書く人＝著者のためにあるのは確かだ。読む人＝読者のためにあるのは確かだ。作る人＝出版者のためにあるのは確かだ。その他もろもろのためにあるのは確かだ。

以上のように考えることができるとしても、それだけでは充分ではない。私が40年余、東京大学出版会の一員として、また個人業主として出版と書物とにかかわってきて得た結論は、次の通りである。

——出版は、将に來らんとする人びとと共にあろうとする《志向性》においてのみ成り立ちうるものである。

——書物は、将に來らんとする人びとのためにあろうとする《志向性》においてのみありうるものである、と。

つまり、出版も、そして書籍もまた、いつもこれから出会うであろう「将来世代」とともにあろうという意思によって基礎づけられることで初めて、成り立ち、そして存在し得るのである。

このような結論に至った経緯を考えると、二つの要因がある。一つは、公共哲学の運動を推進した一般財団法人京都フォーラム（その前身の将来世代国際財団も含めて）とともにこの十数年歩んだことであり、もう一つは大学出版・学術出版の幕末明治以来の先人とともに考え続けてきたことである。

将来世代国際財団が公共哲学共同研究会（のちに公共哲学京都フォーラムと改名）を開始した1998年の翌年1999年から私は公共哲学に関わった。そして30冊の関連書籍を東大出版会から刊行し、ひとつの学問運動を巻き起こした。また、日本国内にとどまらない広がりをもった。その中で気付いたのは、次のことだった。

——出版することは公共哲学を実践することそのものである。

また、大学出版・学術出版のあり方を模索するうえでの先人として考えてきたのは、福澤諭吉はじめ、家永豊吉、高田早苗、一戸直蔵、吉野作造、南原繁、矢内原忠雄らであり、さらに、幽明界を異にした、そして存命の、多くの方々である。1872年2月、福澤諭吉が日本での大学出版組織の先駆である慶應義塾出版局を興し『学問のすゝめ』を刊行し始めた。1951年2月、時の東大総長である南原繁が東京大学出版会を興した。

この大学出版・学術出版の歩みを、公共哲学京都フォーラムで学んだ《出版することは公共哲学を実践することそのものである》とを重ね合わせることにより、《将来世代とともにあろうとすることによって、出版と本はあり得る》という結論を得ることができたのである。

私は、これまでこの道を多くの人と歩んできたし、またこれからもこの道を多くの人と歩んで行くだらう。そのように考えている。

## 将来に開かれる社会を目指して

野島 透

(京都フォーラム方谷塾塾長、山田方谷六代目子孫)

世界は産業革命により大量生産そして短期的な効率性、利益ばかりに目が向くようになった。将来世代のことは考えず、現在の利益のために環境を破壊、個人の人格の尊重よりも画一的な人間を作り出している。このままでいいのだろうか。現在に生きる我々はもっと将来世代のことを考え責任を持つべきではないか。

以上の問題意識を持っている時に、公共経営、公共幸福社会を目指している「京都フォーラム」で「山田方谷」の講義をしてほしいとの依頼があった。

山田方谷は江戸時代末期に、多大な財政赤字に苦しんでいた備中松山藩（現在の岡山市高梁市周辺）において七大政策により財政赤字を解決しただけでなく藩民（国民）の生活を向上させた。その改革成功により藩主板倉勝静は徳川慶喜將軍の筆頭老中になった。方谷も江戸幕府の顧問になり幕末の政治に関与した。大政奉還建白書の原案を作成したとの説もある。明治維新後は「閑谷学校」（国宝）を再興するなど子弟教育に力を入れた。

方谷の理念は「将来世代のために藩（国）だけでなく藩民（国民）全体が豊かに幸福にならなければいけない。」である。改革の目標は「士民撫育」（すべては国民のため）である。改革を実現する精神は「至誠惻怛」（まごころと痛み悲しむ心）である。その理念を支える考え方は2つある。一つ目は「義を明らかにして利を図らず。」（人、企業として正しい道（義）を明らかにして実行すれば利益（利）はついてくる）である。この考え方は方谷の弟子三島中洲（大正天皇の教育長、二松学舎の創立者）を通じて日本資本主義の父渋沢栄一の「論語とソロバン」につながる。二つ目は「事の外に立って事の内に屈せず。」（大局的な視点を持つことが重要）である。

方谷の「将来世代のための、天に向かって開かれている考え方」が、京都フォーラムが目指している考え方と一致していることで、「京都フォーラム方谷塾」が生まれた。その理念は「自己の利益だけでなく皆のため、社会のためそして将来世代のためのより良い社会を、皆で作上げよう。」である。そのためにはA（内）に屈しているのではなく、W（天）に向かって開く考え方をしようである。現在、この趣旨に賛同し、公共のため将来世代のために立ち上がり「方谷塾塾頭」になった方は約100名になった。全国各地の会社経営者のみならず、医者、弁護士、税理士、社労士、大学院生など男性も女性も参加している。

方谷は、「至誠惻怛、國家の為にする公念より出でずして、名利の為にする私念に出づれば、たとい驚天動地の功業あるも、一己の私を為すに過ぎず。」（誠意と思いやりの心を持ち公共の為という思いからではなく、名誉と利益を得ようとする思いから行ったものは、どんなに世間を驚かす大事業であっても自分一人のために実施したものに過ぎない。）という言葉を残している。

方谷塾塾頭を筆頭に皆が、将来世代のために「公共幸福社会実現の道」に邁進するときが来た。そのためには、一時的な努力だけではなく、一生涯をかけて未来永劫、「将来世代に向けての道」に邁進する必要がある。

## ともに道をひらく

中桐 万里子

(親子をつなぐ学びのスペース リライト)

「重要なことは二つだけ。健康第一、それと、良心を大事にすること」

それは、小さな頃、家族たちに言われつづけた言葉です。健康を害すると、他者が心配し、手間ひまを注ぐ。だから、「健康」を自分ひとりのものだと思うな・・・と。金次郎はこれを、「父母も その父母も わが身なり われを愛せよ われを敬せよ」と表現します。「わが身」は、決して自分が築き上げたものではない。それは他者の愛の証であり、注がれてきた種々のパワーの証・・・。家族たちの言は知らず知らずにわたしの内に、「わが身」が決してひとりで維持できるものでなく、常に何者かと「ともに在る」ことを意識づけました。

そして「すべては、先生や世間が知っているのでも、ましてや親が知っているのでもない。それが必要か、正しいか、ウソじゃないか、かっこいいか、すべきことか・・・。どんなときも、自らの良心が知っている。だから良心で判断し、行動しなさい」と言われてきたことにも意味がありました。この繰り返しは、いつしかわたしに「他人を裏切るより、自分の良心を裏切ることがもっとも愚かで恥ずかしいこと」という美学(?)を芽生えさせたのです。

近ごろ、重要だったのは「自分で判断しろ」ではなく「自分の良心で判断しろ」と言われた点だったと思うようになりました。家族たちは、圧倒的に信じてくれていました。わたしの内に「良心」が宿っていることを。そのうえで、「良心」を埋もれさせ、眠らせないように、声をかけ、目を注ぎ、肥しをやり、刺激しつづけてくれていました。それは、単に子どもにすべてを任せる無責任な自由主義や放任主義とは違います。わが子の良心への敬意を払い、いつだって粘りづよく「ともに在り」、けれど同時に、先をゆく者としてたしかに「育てて」もいたのです。このこともまた、金次郎の生きざまや彼が歩んだ軌跡とも重なっています。

現在している子育て支援活動の根底には、そんな幼き日々の家族たちとの経験が横たわっています。わたしは、出会っているすべての子どもたち、すべてのご家族の「身」に注がれてきた「父母やその父母・・・」の尊いパワーやつながりに敬意を感じています。そして、彼ら彼女たちに宿っている「良心」を絶対的に信じています。精確に言えば、「彼ら彼女たちとともに」でなく、「彼ら彼女たちの「身」や「良心」とともに」歩もうとしているわけです。

その実践のため、注意し工夫しているポイントはいくつかあります。「答えはわたしが知っているわけではない」という自覚を手放さないこともそのひとつです。わたしの道はわたしが、彼らの道は彼らが、切りひらく。各人は、それぞれの責任において別の道を歩む存在でありながら、しかし「良心」を軸に「ともに歩む同志」でもある。だからこそ、わたしがすべきことは、彼らが自身の良心と向き合い、自らの道を見出しゆくための環境や関係を整えること。彼らに敬愛を抱き、興味・関心をもち、対話を重ねること・・・と、そんな風に考え実践しています。そして、その実践を通して、あらためて金次郎と出会いなおしている日々でもあります。

## 道開きと「おひらきまつり」の2つの意味

鎌田東二  
(京都大学)

「おひらきまつり」と名付けた祭りを1997年から2008年まで伊勢の猿田彦神社で毎年10月に開催してきた。平成10年(1998年)10月10日に「神戸からの祈り」(1998年8月8日開催)の東京版として、鎌倉の大仏で「東京おひらきまつり」という祭りを行なったことがあるから、合計13回「おひらきまつり」を行なったことになる。

「おひらきまつり」には2つの意味を込めた。「開く」と「閉じる＝終わる(おひらきにする)」という正反対の意味である。新たに何かを開くためには何かを閉じなければならない。そのことを一つの語で使い分けるのだから、日本語の文脈依存性は極端であると思うと同時に、大変面白い思考を展開する民族文化であるとも思う。

猿田彦大神は『古事記』や『日本書紀』の中で、空中立体交差点である天八岐(あめのやちまた)にいて通行してくる者をチェックする眼光鋭き容貌魁偉な国つ神であり、後に天孫降臨一行を案内したことから「道開きの神」や「水先案内」やナビゲーターの神として尊崇されることになった。その点では、賀茂御祖神社(京都下鴨神社)の祭神である八咫鳥(賀茂建津身命)と同様のはたらきをする古神である。

わたしたちはこの「おひらきまつり」という祭りの名称に、「道開き」の意味を込めた。「道開き」には、「古い道」を継承するという意味合いと「新しい道」を切り拓くという両方の意味を込めた。そして『古事記』や『日本書紀』の時代から、あるいはそれ以前の悠久の太古の時代から「踏み固められてきた道」を継承しつつ、それを「新しい道」に接続開通することを企図した。そして、『謎のサルタヒコ』(鎌田東二編、創元社、1997年)『隠された神サルタヒコ』(鎌田東二編、大和書房、1999年)『ウズメとサルタヒコの神話学』(大和書房、2000年)『サルタヒコの旅』(鎌田東二編、創元社、2001年)などを刊行した。それによって、日本神話と日本文化の古層と根源から「道をひらく」ということの意味と力動を問い返し、掘り起したかったからである。

そのような「サルタヒコの思想」というものを一つの基軸に「ともに道をひらく」ということの意味と現実形を考えてみたい。その際、サルタヒコ神を「つつしみ」(土締まる＝慎み・謹み)の神としての力動と倫理として説き、「道は則ち大日靈貴(おほひるめのむち)の道、教は則ち猿田彦神の教なり」と主張した垂加神道の提唱者の山崎闇齋(1618-1682)や「道の思想」を説いた国学者(古学者)本居宣長(1730-1801.)を手掛かりとしたい。そしてもう一つ、具体的な「ともに道をひらく」実践としてNPO法人東京自由大学(学長:海野和二郎、理事長:鎌田東二)の活動を紹介したい。1998年に設立宣言をし、1999年より実質的な活動を実施した「東京自由大学」は、混迷する時代の中で、各個の「靈性」と「身体性」に基盤を置き、真に自由な学問的探究と芸術的表現を二本柱として、大都市東京神田に「魂のオアシス」としての場と交歓の機会を設けたボラティア市民大学である。21世紀はNPOやNGOや各種の「ともに道をひらく」ボラティア活動が社会活動の主軸となるだろう。そのような活動の「地球倫理性」をサルタヒコやスサノヲの靈性から考えてみたい。(参照:NPO法人東京自由大学HP:<http://jiyudaigaku.la.cocacn.jp/>)